

ANAグループの安全教育

～過去から学ぶ～



2-2 三重大事故展示

羽田沖、松山沖、雫石で発生した3つの大きな事故を各専用ブースにて、当時の写真や映像を交えて多角的に個別に紹介

ANAグループ安全理念

安全は経営の基盤であり
社会への責務である

私たちはお互いの理解と信頼のもと
確かなしくみで安全を高めていきます

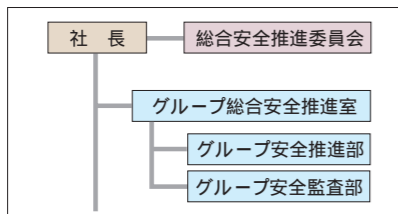
私たちは一人ひとりの責任ある誠実な
行動により安全を追求します

Interview

執行役員 / グループ総合安全推進室担当、
オペレーション統括本部副本部長兼OCC推進室長

中村 克己 (なかむら かつみ)

Profile: 1948年生まれ。1970年ANA入社。東京空港支店乗員部、運航本部乗員基準部、業務推進室乗員業務部長、運航本部安全評価室長、2006年4月より現職。



『ANAグループ安全理念』のもと、日々安全運航を続けていくための教育・啓発活動をより一層確実に行っていくために、このたび『ANAグループ安全教育センター』が完成しました。

この安全教育施設の設定趣旨を中心に、グループ総合安全推進室担当の中村克己執行役員にインタビューしました。

まず、ANAの安全についての組織、取り組みについてお聞かせください。

中村 ANAではグループ総合安全推進室を

設置しており、航空安全についての推進活動を実施しています。安全推進活動としては、航空安全についての施策提言や国内外の関連機関と連携して航空安全に関する情報収集ならびに提供、社員に対する安全教育・啓発活動等を実施しております。その安全教育・啓発のひとつとして2007年1月、ANAの研修施設内に『ANAグループ安全教育センター(ANA Safety Education Center = ASEC:エーセック)』を設置しました。

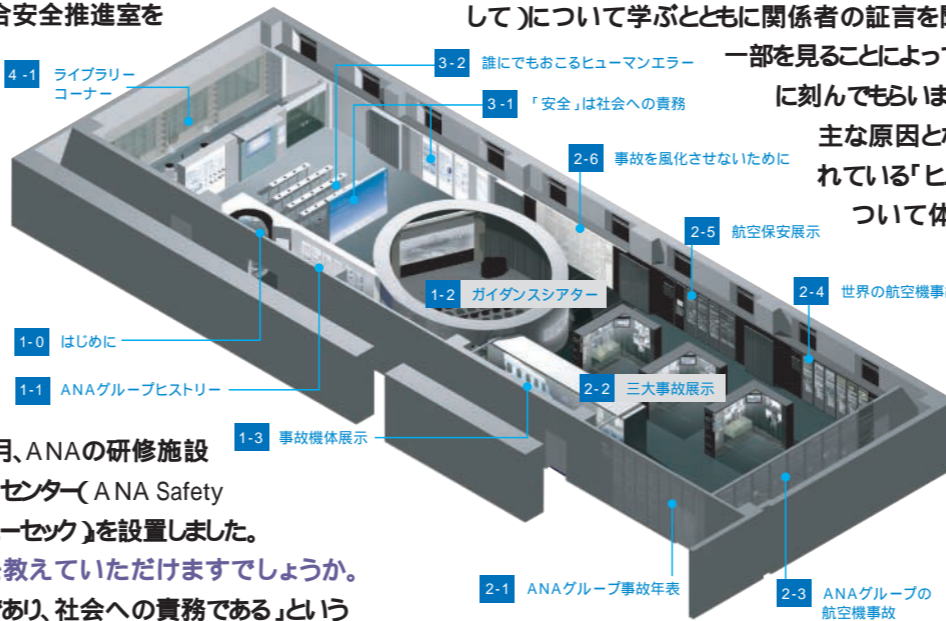
施設の設定趣旨、概要を教えてください。

中村 「安全は経営の基盤であり、社会への責務である」という



1-1 ANAグループ歴史

ANAグループの成長はご利用いただいたお客様とグループ社員の総力であり、同時に安全はグループ社員一人ひとりが支えるものであることを確認



1-2 ガイダンスシアター

事故を過去の歴史としてではなく、現在に受け継がれる安全の原点として扱い、犠牲と被害など、さまざまな意味を問いかける



ANAグループの安全理念をグループ社員全員が心に

刻みつつ、日々安全の向上に取り組み、その姿勢を貫き、緊張感を持続するために、安全教育施設を設置することになりました。具体的にはANAが経験した事故(東京湾羽田沖墜落事故(1966年)、松山沖墜落事故(1966年)、雫石衝突事故(1971年)の三重大事故を主として)について学ぶとともに関係者の証言を聞き、事故機体の

一部を見ることによって事故の重さを心に刻んでもらいます。さらに事故の主な原因となっている「ヒューマンエラー」について体験学習を交えながら学び「自分は今後、何をしたいのか」を考える施設です。

具体的なきっかけは、なぜ今、設置したのでしょうか。

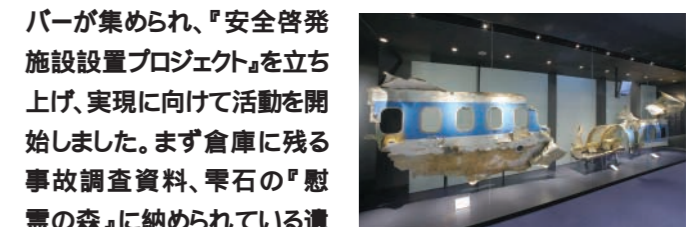
中村 最後の旅客死亡事故(雫石事故)から35年以上が経過し、全社員の約94%は雫石事故以降の入社となっています。そして来年度には事故を知る社員の約半数が退職します。そのような状況の中で、2005年度の『バーチャル・ハリウッド』という社内提案制度で東京空港支店旅客課の社員ら12名が提案した『過去から学ぶ』というタイトルの事故展示施設の設定案が採用され、これが施設発足の原動力となりました。

過去の事故の公表は大変に勇気の要る判断だと思いますが。

中村 私たちは、事故を教訓に幾多の困難を乗り越え、空の安全を確保してきました。しかし若い世代はその苦しみを直接的には知りません。だからこそ過去の事実と向き合うことに価値があるのです。明日のANAに事故がないとは断言できないからこそ、事故は決して起こさないという安全に対する全社的な決意が大切なんです。

実現にはどの部署が担当したのでしょうか。

中村 グループ総合安全推進室のもとに、全社から20名のメンバーが集められ、『安全啓発施設設置プロジェクト』を立ち



1-3 事故機体展示

雫石事故の機体の一部を展示することにより、受講者に航空機事故の現実、悲惨さを肌で体感させ、安全への責務を共有

上げ、実現に向けて活動を開始しました。まず倉庫に残る事故調査資料、雫石の『慰霊の森』に納められている遺品の調査や当時事故に携わった方々の取材など、あらゆる情報の収集から始めました。展示にも工夫を凝らすため、JR東日本の『事故の歴史展示館』や、日本航空の『安全啓発センター』など、さまざまな施設にも足を運びました。事故発生後、長い年月が経過しているだけに、資料集めだけでも大変でした。

『ヒューマンエラー体験コーナー』があるそうですね…。具体的にはどのような内容なのでしょうか。

中村 グループ総合安全推進室で行っていた『安全教育』をベースに、『失敗の心理学』や『失敗のメカニズム』などの著書がありこの分野で有名な立教大学現代心理学部の芳賀繁教授のご指導によって、満足のゆくレベルのコーナーとすることができました。具体的には、ハンコンを使用して課題を出し、受講者がそれに従ってキーを入力。そこでエラーの発生を体感するとともに同じメカニズムで発生した事故事例を学ぶコーナーや、エラーを誘発しやすいデザインの什器を設置し、受講者が実際にそれらに触れて、エラーを体験させるコーナーを設置しています。航空機製造メーカーの分析によれば、



3-2 誰にでもおこ

るヒューマンエラー

このコーナーでは映像スクリーンと手元のテンキーによるエラー体験機器などを使用して、エラーを犯す可能性を体験させることで受講者の理解を促す

航空機事故原因の約6割以上はヒューマンエラーがかかっているものと言われています。ですから、いかにヒューマンエラーの影響を小さくするかが、きわめて重要なわけです。

教育形態はどのようになっていますか？

中村 この施設の利用対象者は約3万人のグループ社員全員ですが、新入社員から熟練社員まで、利用者のレベルはまちまちです。そこで、基本的にインストラクターが職域とレベルに合わせて説明する方式としました。なお、古い機体を知らない世代が大半なので、各展示にはグラフィックや、CG(コンピュータ・グラフィック)を使用するなど、理解を促進させる工夫を凝らしました。



「固定観念や先入観が、ヒューマンエラーを誘発する」体感コーナーにはヒューマンエラーが起こり得る状況を説明する写真や資料、施設が設けられている。下の写真はその一例。

誰もが陥るヒューマンエラー

「固定観念や先入観が、ヒューマンエラーを誘発する」体感コーナーにはヒューマンエラーが起こり得る状況を説明する写真や資料、施設が設けられている。下の写真はその一例。



人は、光が上から照らすものと考えているので、この写真では、一見すると中央部が盛り上がった山と認識できる。ただし、写真の天地は逆



次に写真を正しい方向から見ると、山は窪み、クレーターであることがわかる

受講のスタイル、また時間はどれくらい必要ですか？

中村 大きく4つに分かれたゾーンを約20名以下の人員で、施設内の順路に従って学習していきます。最初は施設の目的とグループの成長などを学び、『グループの一体感』を共有します。次にANAの事故や、ハイジャック事件などの詳細を画像やパネルで学び、二度と事故を起こさないという思いを強く持ってもらいます。さらに、安全を構築するための仕組みを学習し、最後に『自分の心に刻む』ために先輩から後輩へのメッセージを聞いてもらいます。この過程で約1時間半となります。



2-6 事故を風化させないために

零石事故のご遺族の手記を展示。事故の重みと関係者の意識、社会に与えた当時の影響を風化させないための展示回廊

「ASEC=エーセック」の設立は社員にどのような効果をもたらすのでしょうか。

中村 日々の業務では直接運航に携わらなくとも、当施設を見学することで、ANAグループの経験した『事故の事実』を正しく理解できます。受講者すべてがグループ社員としての一体感・連帯感を抱きつつ、『グループ安全理念』を自分のものとして、つねに謙虚な姿勢で仕事に取り組むように促し、グループ全体で安全文化の構築と浸透の重要性を培いたいと思います。



ありがとうございました。

航空安全にご興味のある一般の方に...

ASEC見学について

ホームページをご覧ください。

HP(<http://www.ana.co.jp>) 企業情報 安全・運航情報
安全への取り組み Safety Education 安全教育

* 基本的に社員の教育施設ですので人数制限等で予約ができない場合がございますが、何とぞご理解をお願い申し上げます。